

幼稚園の親の会の指導について



川崎 千束

テーマは親の会の指導というのですが、指導などというおこがましいのではなく、書くことによって私の所属する園の母の会をも反省してみたいという気持もあって私見を記しました。

何のために親の会があるのか

親の会とは、子どもを良くするために、親が幼稚園に協力する機関である。——簡明に言えば、こう定義されると思いません。協力するには相互の理解が必要であり、良くする、というその良^くの価値観を同位にする必要があります。

入園考査の面接の場で、「どうい^う目的で幼稚園に入れた^いと思いますか」という問いに対して母親自身の考えによるひたむきな答をほとんどきいたことがありません。入園考査の面接という特定の場のせいもあるでしょうが、育児書に記された言葉の断片の暗記。隣り近所の子がいくので。別に……目的など

というものは。〇〇小学校を希望しているので、幼稚園も良い幼稚園を。というような答えぶりです。

1、スクールバスがないこと。2、制服のないこと。3、他園にくらべ保育料が安すぎる。こと。

右の三つの理由で、良心的経営の幼稚園を拒否して、わざわざ遠方のマンモス幼稚園を選んで入園させたという事実談をききました。

右掲の三項によれば、子どもの理想とする園と、母親が良いと考える幼稚園の条件は全く相反するものであるということを知らされます。このように出発点から異なる分子。確たる家庭保育の方針を持たない分子。自主性なく同調する分子。ママゴン分子。それらを幼稚園という集合体の中で融合させ、そのエネルギーを強めていく媒介物としての教師自身の役割を再認識してみる必要があります。

子どもの入園と同時に、親の幼児教育への眼を開眼させ、その向上と親同士の親睦を計るということを、子どもの保育と併わせて車の両輪のように考えるべきであると、概念としては知りすぎているのに、私自身、親の方の問題を臆怯がって、そのうち理解できるだろうと安易に考えてしまい、園児の今日の保育について専念してしまいます。臆怯がするのは私の場合、怠惰であるのと、説得力がないからでしょう。説得力の不足は、女性として古い教育を受けてきた弊害でしょうが、在園僅か二、三年という短期間なのに、いつかは理解出来るだろうなどという怠惰さは、幼児教育者として失格であると反省させられます。

入園に際して、園の方針、及び幼児教育が人間形成にいかにか大切であるかを、どこの園でも園長が親に対して力説されると思います。これによって、とにかく親たちが、幼稚園の何たるかを理解したであろうと、考えてしまうのは早計であって、この時はほとんどの母親が「わが子もいよいよ幼稚園」という認識の高まりで、興奮と緊張とで武者ぶるいし、折角の話は、断片的走馬燈式に通りすぎていくようです。

園長が力をこめて、入園は集団の一員となることである。集団の中で共々伸びていくのであるから、友だちは人間形式の糧である」と話したはずであるのに、入園後一ヵ月も経た頃になると、わが子の気弱さ不適応さは反省しないで、

「どうもあのお子さんとは気が合わないようで、隣席の子にい

じめられるらしく登園をいやがって」というような母親の訴えをしばしば耳にするのは、入園の興奮がやおら醒めてきた上に、親としての心構えをまぼろしのように聴いてしまった結果のように思います。

ここに親の会の必要が生じます。

わが子だけ、わが子こそ、という視野の狭さを取り払い、親もまた集団の中で、親の使命を自覚し、親同士親睦することが、ひいては、子どもの情操の発達に大いに関与する。——と認識させることが必然的に課題になってきます。しかし、いうは易きながら、内包する思考を変化させ是正していくことは容易なことではありません。私も怠惰な心に管打って、入園式と同時に、この原子核にも似た効力と危懼とを内包する親の会を幼稚園の平和向上の利器とするよう努力しましょう。

子どもと共に親も伸びていくには

親の会の向上のために、どこの園でも指導的な講師を招いて講演会が催されると思います。講師及び講演の内容は個々の園の事情によって選定されるのもちろんですが、私どもでは、園長が心理学者であるという恵まれた条件下にあるので、講話の内容が幼児の発達心理について系統だてて進められます。ために、二年間の在園で母親はほぼ、短大で学ぶ程度に近い幼児心理の講義を聴講するような形になります。この講演の内容を

系統立てるといふ型も示唆になると思い記しました。

また、堅い内容の講演を軸に、教養番組的な講話を副にといふ具合に、年間の講演に計画性を持ち、地域の親たちの何を一番育てるべきかをよく検討して、硬軟取り交ぜるといふ配慮も地域によっては必要でしょう。しかし講演だけで、事足りりという訳にはいかず、会という集合体の向上には個の指導から始める必要にせまられます。折にふれ、ことに当たり、棒をつかんで、園長の幼児教育の理念を現場にまでおろしてきて、それぞれの子どもの具体的問題に置きかえて、わかりやすく親へのコミュニケーションを十分にすることが、現場の教師の義務であるとさえ極言できます。

公式な懇談会、面談の他に、迎えてきた母親とブランコの傍で、あるいは箒を手にしたままでも、または昨日の忘れものを渡しながらでも、次のような会話をすることも、母親の心に、まっとうな保育のともしびをともしたいからで、そうしてそれが親の会の方向を正常づける直路だと思ふからです。

「きょうは○○ちゃんたちと、ままごとで、きれいなお料理をつくってました。こんなのをお母さんがお誕生日につくってくださったのといいながら。遊ぶ友だちによって、その日その日ままごとのお料理まで変化します。」

「○○君は、きょう砂場で裸足になりました。五、六人で一致して大仕掛けの地下鉄工事をしていました。二時間ばかり

没我の境。そんな没我が、うらやましくなりました。美しいと感嘆したい横顔をみながら、子どもの世界の本ものがここににあると思いました。

「きょうは当番でしたね。お母さまが持たせてくださった小松菜を、十姉妹がよろこんでたべるといって、得意になって誰彼なく吹聴していました。」

「ざりがにが後にはうのをじっとみていましたが、そのうち、自分もそのはい方を真似して、しまいにはレコードをかけて踊ってましたよ。○○君にこんな面もあったことを、私も、きょう発見しました。等々。」

子どもの園は小人数なので、右のようなコミュニケーションができるのですが、多数のところでは、連絡帳などを活用して、折にふれ書きこまれるのも一方法かと考えます。

因に、私は幼稚園のマンモス化には反対です。理想としての園児数は二百名以内。スクールバスは使用しないことに賛成です。幼稚園の親としては、(保育所は別)送り迎えは当然の仕事のように心得ます。送り迎えすることによって、道すがらとりかわすふとした会話の中で、思わぬ子どもの成長を見出したり、無言で歩いていても、降園直後のこの子は、朝とは違う充実感があると感じたり、こんな感覚は母親としての幸福感だと思えます。つまり生きる喜びだといえます。私など遠い思い出なのに、郷愁のようにこの頃の幸福感が、今だに胸にただよ

います。スクールバスは、母親の生甲斐の一つを奪ってしまうまがもののようにさえ思えてきます。

遠足、園外保育、運動会、誕生会などの行事や身体検査週間、体力測定のようなもので、親に連絡する場合、単に事項、日時の通知だけに止まらずその都度、その目的と目的選定の理由とを、しっかりと親が納得するように、通知する必要があります。

若い母親の中には、遠足ときいただけでわくわくしてしまい、服装や弁当などにかかずらわってしまつて、肝心の目的は模糊とってしまうのがあります。何にでも浮々とするその若さは必要ながら、子の親として、幼稚園児の母としての心構えを培い、視野を広げたり、物の考え方、捉え方、判断力というものを、子ども同様、現実即して育てていくことが肝要です。

付け加えたものに読書があります。幼稚園の親の年齢層では、欲しい読みたいと願う本が、そう容易に購入できない実状ではないでしょうか。図書購入費が家計簿に、どれほどのパーセンテージを示していることか。図書館を利用するほどの余裕もないという母親たちのために、幼稚園の一隅に母親の読書コーナーを設けたいものです。揃える本は、もちろん地域差、購入費の多少により左右されると思いますが、コーナーという気易い雰囲気にしたものです。このコーナーの本は消耗品と思ひなして、面倒な貸出し帳簿など備え付けないようにします。

とかく制度とか規約とかいうものが先行すると、かえつて初志の目的から曲つてしまひ永続しないようです。続けていくうちに、おのずと運営や選本の道すじが立っていくことでしよう。要はたとえ消耗品化してでも、いつかは親たちの胸が充実感にあふれ、その向上に役立つなら目的は達せられるのです。時には教師を交えて、きばらない読後感を話し合うのも、育てていく過程では試みたいものです。

学窓を出て三十数年も経た私どもの同窓会は終始、喋る楽しさにつきるのですが、気ままなおしゃべりの中で、数々の教えられるものを私は得ます。それぞれの人生を歩んで、三十有年。それぞれ何ものかを握つて成長し、その各人各様の人格から出る言葉に胸打たれます。親たちの読後感なども、気楽にその人それなりのものが話し合えたら、各人の成長の栄養素となりましょう。

ある園では、一学期に一回、園長教師親たちの所感見解をまとめて園だよりを発行し、(編集発行とも母の会の有志が当たる)それによつて園の方針が浸透し、母親同士の理解が高まり、よい結果を得ているとのことでした。これらも参考になりましょう。しかしどの園でも実行できるというものでなく、地域によつては負担になるとも考えられます。負担になることは「育てる」とはおよそ縁遠いものになりましょう。

これらの費用を得るために、月並ながら、バザーなど開催す

ることどもが浮かび上がります。

親の会の親睦を計るには

合唱隊の編成で親睦の実をあげておられる園もあると思いますが、前記の園日より同様の園でも実施できるとはいえませんが、バザーのようなものなら一般的でしょう。読書コーナーの本代の捻出にバザーをと記しましたが、金銭的なことよりも、親たちの親睦を第一義の目的にしたいものです。運動会、遠足と親たちが一しょになる機会はたびたびあっても、クラス単位にかたまる傾向があり、一園一丸となる親睦はバザーが第一のようです。私ははじめ、バザーには反対意見を持っていました。

合法的なものでなく、バザーによってまで資金の援助を受けるのを潔しとしなかったのと、物質の援助をうけることによつて、いつとはなしに幼稚園の教育方針がねじのゆるんだ羅針盤のようになることを怖れたからです。

私どもの園の創立十周年記念事業の一つとしてバザーを開催した結果、私のところは杞憂であることを知りました。爾後引き続き今秋で六回目を催そうとしていますが、毎年純益の多くを望まず、母親同士の親睦に重点をおいて開催します。親睦になるのは、バザーの出品物の在り方で、新品同様の不要品交換の友愛セールの出品物と、母親たちの手になる手芸品とが主要

出品物になります。

秋のバザーに六月頃から準備にかかり、手芸品をつくるために寄り合う度数が多くなり、その頻度に正比例して、ぐんと親睦度が上昇します。たびたびの集合で、井戸端会議的な話の花が、製作の動力となつていゝとは想像されませんが、井戸端会議は一種の息抜きで、話すだけ話せばゴムが弾力でもどるようになり、本然の姿に立ち戻ると思っています。この種のおしゃべり人間が生きていく上の潤滑油になるのだと思います。現今のように、核家族、アパート生活では孤の時間が多いであろうと思います。人間は真の意味での孤立は不可能だと信じます。そのことは社会性と人間性とは同義語だといわれているのに照らしても自明のことです。

しかし、くれぐれも注意しなければならぬことは、幼稚園側も親側も守るべき節度は、お互いに厳然と守るということです。ことに幼稚園側はバザー旋風に巻き込まれないよう、幼稚園はどこまでも、幼児のものという根本精神を見失わぬよう、確たる信念を必要とします。この節度が崩れるようなら、バザーは開催しないことです。バザーにも幼稚園側の指導と深い配慮がやはり必要になってきます。

幼稚園と家庭の役割り

大体に幼稚園は、ことに私立幼稚園はサービスが過剰のよう

です。何故でしょう。その経営費のほとんどを、園児の保育料に依存するからでしょうか。物質的な面で親たちに依存するという精神を、たとえ私立幼稚園であろうとも、さらにと捨てたかと思ひます。保育料、入園料などは、地域社会に応じ、園の事情に即して、矜持をもつて徴収してよいと思ひます。

その他の経営に必要な経費は（ここに精しく書けません）合法的に国家が支出するよう予算獲得に団体の総力をあげて、たたかうべき秋がきているのではないのでしょうか。

スクールバスなど過剰サービスの副産物だと思ひます。

幼児教育は、家庭と幼稚園とが相互に密接に関連し、その統合のもとに行なわれると思うのですが、おのずとその役割はありと考へます。幼稚園教育が家庭教育にとってかわるような、過剰サービスは、幼児の幸せにはならないことをわきまえたかと思ひます。

元来、幼児は物質、精神両面ともそのよりどころは家庭にあります。情操の一番発達する幼児期に家庭教育の果たす役割は大きいと思ひます。たとえば夫婦の信頼度の高い暖かい母子関係の中で育てられたら、しらずしらずその子の中に、豊かな情愛、信頼というものが育っていくことでしょう。それが家庭における情操教育や躰の源泉だと思ひます。

その基盤の上に幼稚園教育があつてよいと考へられるのに、現況では、しつぱな面まで幼稚園が担い手になつています。

こういう源泉的なことは、集団的平均的にやることでなく、家庭教育の中で、進められてこそ、徐々に身につけて人格形成の根幹となるでしょう。幼児教育のシテ役は家庭にあることを、幼稚園側も再認識すべきで、そしてその認識を家庭側も認識するように導くのが幼稚園側の役割だと考へます。

家庭教育を考へる時、子どもの正常な発達のために、父親の教化もきわめて大切です。父親にも幼児教育を理解し、真剣に考へる機会をつくりたいと思ひます。『親の会の指導』という標題に、ここに力点をおいたら、共鳴もあろうかと考へたのですが、父の会の大切さを痛感しながら、良い方策が見当たらず、何もしてないので書く資格がありません。

最近の研修会でも父親の女性化が問題にされ、また松田道雄先生もその著書の中で、

『父親の株ほど下落のいちじるしいものはない……云々』と書かれています。果たしてそれは形の上だけか、心底そうなのか、ふれ合う機会が少ないので何ともいいがたいのですが、子どもの問題で、幾度母親と話し合つても私どもの真意を汲みとつてもらえない場合、父親に話せば一べんに疎通します。さすがに視野が広く、社会化の観点に立つて物事を理解します。この父親たちが、幼児教育の重大な家庭教育というものに對し、今よりも、もっと関心を深めるなら日本の子どもの幸せは倍加することでしょう。（東京家政大学付属みどりヶ丘幼稚園）